

研究の棊

日本古建築の研究棊 (第十回)

工學博士 天 沼 俊 一

第二十 妻 節 (下)

鎌倉時代には總計六七種あつたらうから次に記してみやう。

相不纏家扱首式最も多く、古いところでは例の大和忍辱山圓成寺境内春日・白山堂、山城宇治の宇治神社拜殿等皆夫れである、第五十八圖(四)は大和布留の官幣大社石上神宮拜殿の妻で、これは此時代の神社社殿若くは其關係建築に最も多い形である。其他實例はいくらでもある。

虹梁の上に背高く巾廣き外觀頗る重要なる大板裏股を置き、其上の斗と肘木とで棟木を支持してゐるところの虹梁裏股式は、曩に記した東大寺關伽井屋の他、小建築就中四脚門に多い、現に此關伽井屋の直ぐ隣りにある法華堂北門がさうであつて、これは四脚門である。不退寺南門・十輪院南門・新薬師寺南門及東門等いくらでもある。京都市でなら教王護國寺四脚門及び同寺西南隅にある灌頂堂の東門がさうである。

當代の作なる『小野御幸繪卷』には、妻節として

第五十八圖

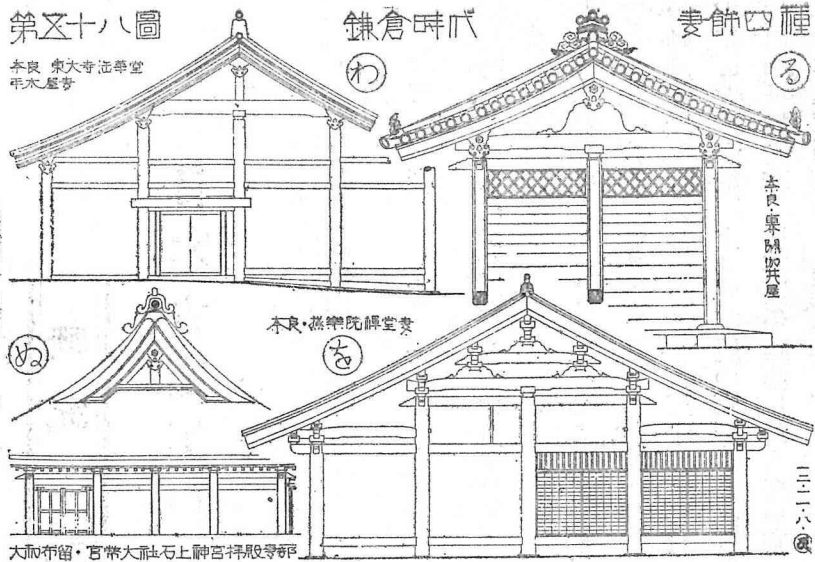
本良 東大寺法華堂
平水屋脊

鎌倉時代

わ

菱飾四種

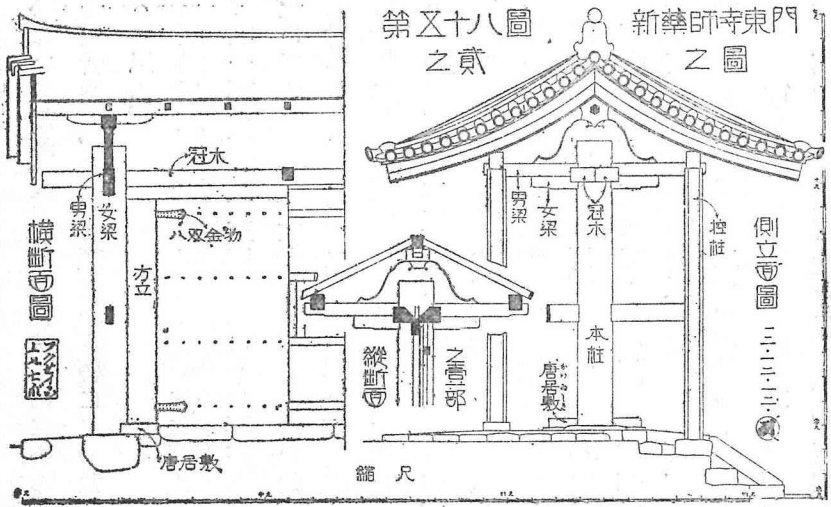
る



大和布留・宮幣大社石上神宮禰股寺

三二八

大幕股を置き、本柱の先きが延びて此幕股を両面から狭み、冠木が更に両面から本柱を狭み、破風の拜みからは梅鉢懸魚の下つた檜皮葺の門が二つ迄出てゐる、尤も此場合には大幕股の下は虹梁ではなく普通の梁になつてゐるが、兎に角柱の先きで大幕股を狭んでゐる。「法然上人行狀繪圖」に載せてあるものも、猶且右に記したのと同様式である、其他探したらまた相當にあるだらう。實例とする事が出来るので、當代の盛期と認めらるゝ者では、私が寡聞のせいであらうが、奈良市新薬師寺東門(第五十八圖の二)と、たつた今かいた東寺灌頂堂の南門と、この二つの實例を知つてゐる丈けである。尤も當代の末期——ことによつたら桃山の極く初期かも知れぬ、何分私には永祿頃に出來たのと元龜から天正の初めにかけて出來たのとの區別は、銘でもない限りの確に決定し兼ねる場合が多いから——らしいのならもう一つ知つてゐる、夫れ



は大徳寺塔頭龍翔寺(元の興臨院)の大きな平唐門で、前の二つに比べて多少見劣りはするが、ほんとは左様な事をいふのは贅澤なので、實例の少ない今日に於いては、何れも甲乙なしの貴重な標本と言はねばならぬ。ずつと降つて、其上本柱が四角なのなら、教王護國寺塔頭金勝院の門がさうであるがこれこそ柱で墓股を挟んでゐるといふ丈けであつて、大したものではないが、序だから書いておく

此新薬師寺東門も、實は大分に模様替がしてあつて、控柱も扉も極も木負も茅負も何も彼も替つてゐる、だから真物をみた時も如何にも慊らぬ、のみならず圖でみても頗る工合が悪い、此點に於いては教王護國寺の、方がいゝが、併し本柱と墓股とが當初の儘だし、様式からも此方が古い様と思はれる。尙ほ後者の方は實測圖も手元になかつたから、旁前者の圖を掲げたのである。

この虹梁墓股式は、前代には繪卷にある丈けで

實例はないのだが、當代の遺物は澤山にある、以下各時代皆然り、だから鎌倉から盛になつたと言ひ得ると思ふ。

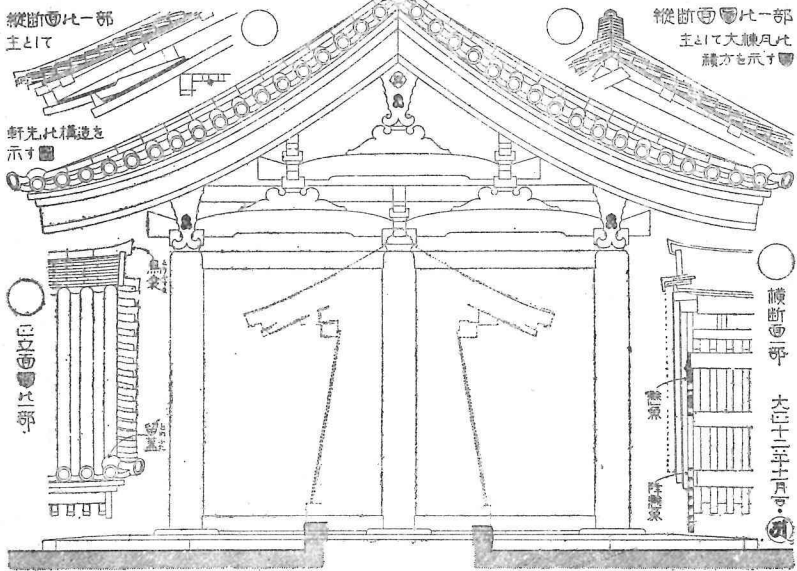
二重虹梁墓股は極樂院禪堂にある(第五十、此圖は嘗て其一部を第三十三圖④示にした事があつたが、改めてこゝに其全立面圖をかいておいたが、これは考へやうによつて二種類の解釋が出来る。其一は奈良式の直寫で、たゞ夫れを鎌倉式でやつたとみるのと、其二は全く奈良式ではあるが、敢て直寫したのではなく、此式が妻の手法に頗る遍してゐるので、淘汰されずにいつ迄も續いてゐたのだ、其證據には、いゝ例が鳳凰堂にあつたのである、夫れを當代へ來ても尙採用し、細部の手法は全く其時代の様式で施工したのである、と考へるのである。私はこの二つの内後の様に考へ度いと思ふ。併し何れにしても「鎌倉式の細部をもつた奈良式の妻」とは言ひ得るので、丁度興福寺

東金堂や喜光寺金堂(奈良縣生駒郡伏見村菅原)を「室町時代の奈良式建築」といふのと同じである。

當麻寺曼荼羅堂の内陣は化粧屋根裏で、柱の上部には此式のうちでも特に立派なのがあるが、常に光線が不足勝ちで、天氣のいゝ日の午後でないと見えぬ、其上あれは四注だから、この内部の立派な裝飾は妻からは見えぬ、洵に惜しいものであるが、若しあれが入母屋で、あの二重虹梁墓股が妻に出てゐたら、夫れこそ當代稀にみる傑作で、此禪堂より遙に上席を占むべきものである。併しあれは創立が奈良時代にある以上、當然四注たるべきであつて、到底入母屋等になるべき性質の堂ではないと思ふ。いくら四注が流行しても、今ならあれ丈けのを妻に見せ度いど入母屋を主張するかも知れぬが、昔は人に見せびらかす爲めに佛殿を建てたのではない、また夫れに従事した建築家も、出来る丈け自己を廣告してうまい事にありつ

第十九章 護王護 寺蓮花門側立面

第九卷 研究の栞 日本古建築研究の栞



かう等いふ量見は起さぬ、腹の内が綺麗であつた上競争者が少なかつたから、そんな必要は更になかつたのである。一方寺としても、後に記す様になるべく大きな破風をかけ、遠方から見える様にして参詣人を吸収し、賽銭を餘計に上げさせる手段を講せぬでもよかつたからである。

教王護國寺の諸門は大概此式の妻であるのは甚だ面白い事と思ふ。あの寺の創立は延暦十五年といふから、際どいところで平安時代に入るのであるが、(其様式が奈良風であつたのは想像するに難くないので) 今日其俤は慶賀門や蓮花門や東大門(不開門)等に残つてゐる。此等の門は鎌倉時代の再建だから、様式手法が鎌倉なのは勿論であるが、あの幕殿の形はどうしても東大寺法華堂・法隆寺傳法堂、及びちとよすぎるが唐招提寺金堂の等を思はしむるもので、鎌倉時代の建築家の頸から出た形ではなく、延暦當時の式を此時模したとより

他には考へられぬのである。どうか第五十九圖を熟覽せられた上、近くに住まるゝ方は實地を見られ度い。

大虹梁束式のは余り例はない様である、どうも不自然で物足りぬから流行しなかつたのであらうと思ふ。第五十八圖^㉔は私の知つてゐる唯一の例で、虹梁中央に立つてゐる束は圓形の断面を持つてゐる、現在は北側のは大分に朽ちて居り形も満足ではないが、南側のはちやんとしてゐる、併しこの方は材料は新しいかも知れぬ。斯様な整はぬ事をしておくよりは豕扱首の方がどの位いゝか知れぬ。ことによつたら當初は豕扱首であつたかも知れぬ。北側に近い方は忘れたが、南側に近い方は内部も妻と同じく大虹梁の上に圓い束をたてゝあるが、室町時代に何か都合あつて相隣れる柱二本を抜き取り、柱三間を通じて大虹梁を架渡してある。其他内部は隨時隨所に勝手な模様替へがし

てあるから、いつ何時扱首束扱首竿に代ふるに圓束を以てしたか判らぬ、虹梁の上端を調べた上扱首竿のあつた形跡が明白であつたら取消すが、夫れ迄はつまらぬ型だが妻飾の一様式として掲げておく。

右の束に代ふるに大瓶束を以てすると所謂大虹梁大瓶束式になる、だからまあ前の式は此の中へ入れておいても差支ないのである。扱て此式で私の知つてゐる範圍で最もいゝ形と思ふのは大和室生の室生寺灌頂堂妻であるが、これは豫め第三十八圖の^㉕から大瓶束の圖中に、特に正面と断面とを示しておいたから、繰返してよく觀察せられ度い、此れはなせいゝかといふと、簡單で變化に富み虹梁の反りや大瓶束の膨み工合は何れも申分がない。其他圓覺寺舍利殿・觀心寺本堂・永保寺開山堂(岐阜縣可兒郡 文和元年)等何れも此種類である、第六十圖^㉖なる東大寺法華堂禮堂妻飾亦此れに屬する。

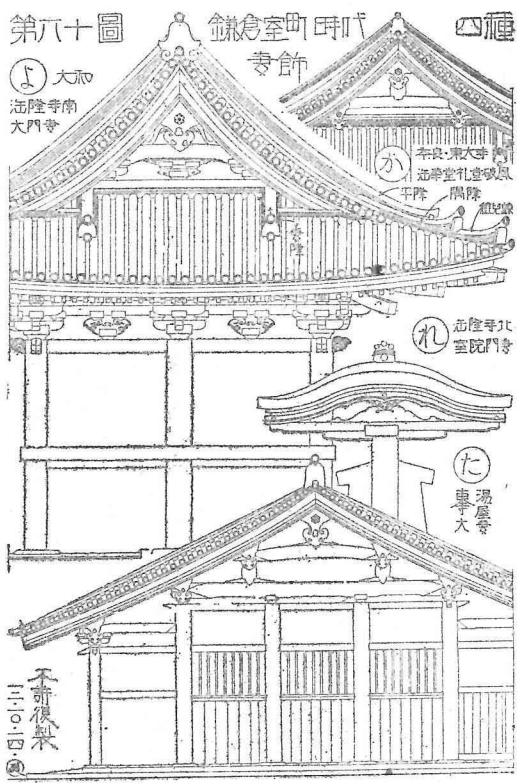
此大瓶束の兩方へ笈形(第六卷第一號第一五〇頁及第卅九圖)をつけた

のは當然此式へ入れていゝのである。曩に笈形について記した時鎌倉時代の例を擧げる事を失念して了つたから、改めてこゝに記しておくが、法隆寺東院鐘樓の妻にあるのは最古の形ではあるまいかと思ふ

どうも此時代の笈形附大瓶束の遺品は餘り澤山ないやうである。

二重虹梁大瓶束

式の一例は明通寺本堂(福井縣遠敷郡松永村 正嘉二年)にあるが、私は未だ此建物を實見してゐぬ上、小さい圖でみて記すのだから、果して此の妻が當初ものか或は後



の修繕か判らぬ、併し其虹梁のはどうも後のものらしい、大瓶束も少々變だが如何にも小さくてよく見えぬ、で假に修繕してあつたとしても其際在

來の式を踏襲したなら夫れでいゝが、例へば法隆寺金堂や中門の妻の如く勝手に換へたのだと證據にならぬ。

併し東大法華堂禮堂の内部は、改めて記す迄もなく化粧屋根裏で、其構架式は二重虹梁大瓶束の

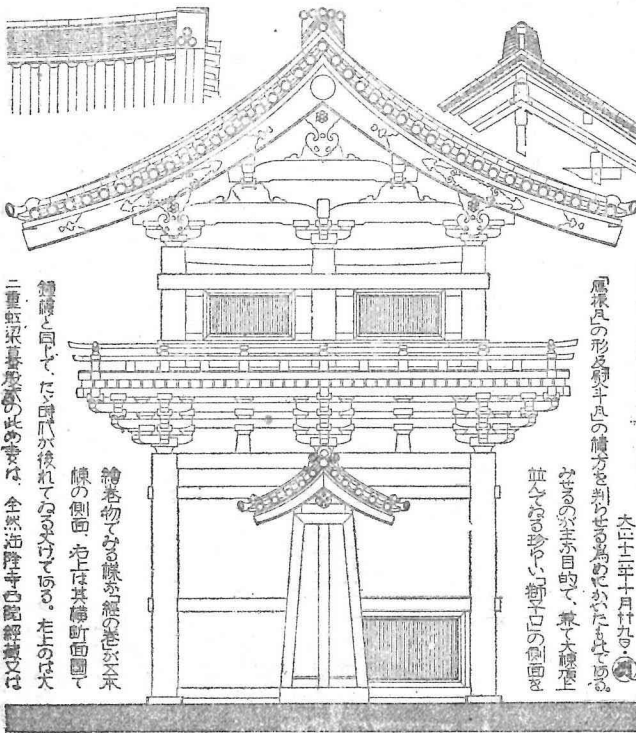
間に通肘木を一本づゝ入れた、手の込んだ頗る斬新な面白いものであるが、内部にせよ斯様な式が存する以上は妻飾に此れより簡單な二重梁虹臺

股があつたと想像するのは至當である。

故に前記明通寺の妻飾が當初のものであつたら
勿論、さうでなくとも法華堂禮堂の例から當代に

此式の妻飾があつたとしておく。いづれ氣をつけ
て調べていつかまた追加して記す事もあらう。
最後に例へば第六十二圖㊦・㊧の如く、妻全體

第一壹圖 八坂神社西樓門側立面圖



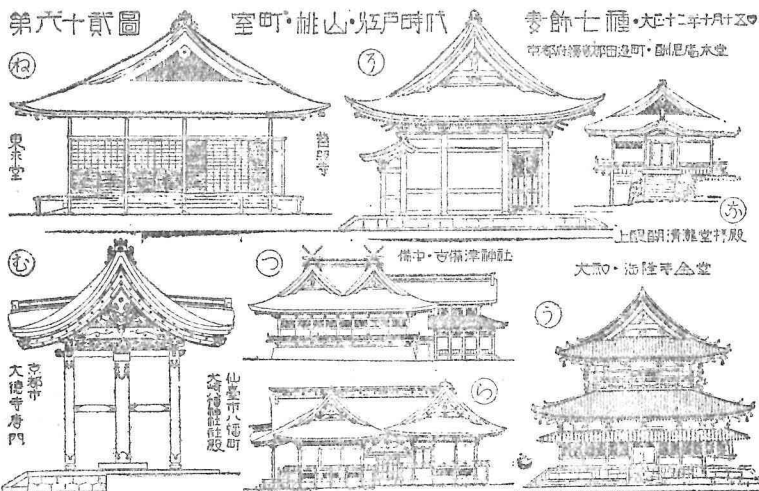
大正十年十月廿九日
鳳塚氏の形及銅平瓦の積方を判りせる爲めに於たしなり

ひまのがま赤目切、兼て大腰腰
並へたる珍らしい御堂口の側面を

繪巻物たる縁の巻が六米
繪の側面、右は其構断面圖で

鐘磔と白七、た時八が後れてゐるだけである。左のは大
二重虹梁喜慶の此めきは、全然近隣寺の西院經藏又は

を格子に組んだのがある、これは此
時代から初まつたらしく、前時代には
はないらしい。其實例も當時のもの
が今日に残つてゐるのがあるかどう
か、つい氣がつかぬが、周到の注意
を以て復原した例なら一つ知つてゐ
る、夫れは宇治の上神社拜殿の妻で
あの格子は先年大修理の際全部新し
く造つたのだが、あの工事に關係し
た人からきいたところによると、建
物解體の際、破風に明瞭に継子のか
たがついてゐたので、當初格子であ
つた事が判つたから、今ある様に造
りかへたのだ、と。



今其格子を見るに、縦横の子は割合に細く、四角に組んだ目は割合に大きい。此拜殿には葎格子が澤山あるが、其内裏側即ち本殿に面した方の側に古いのがたつた一枚残つてゐる、縦横子の大き六分角、目の大き一寸九分に二寸一分である。妻の格子は寸法を測定しかねたから、記す事が出来ぬが、大體この葎によく似てゐる、ことによつたら破風に残つてゐた型及び此の格子を斟酌して造つたのかも知れぬが、何れにしても此れはよく古式を現はしたものと云へやう。尙ほ妻の格子裝飾は古い繪に立派なのがある。

繪といふのは曩きにも引いた『小野御幸繪卷』で大棟に瓦を置き其末端に獅子口を飾つた、入母屋造檜皮葺の家が描いてあるが、其妻飾は疎ら格子に組み、破風の拜みには梅鉢懸魚らしいものが下つてゐる、ものによつて一概には言へぬが、斯様なものは無いのを想像でかく筈はない、當時あつ

たからこそかいたと思ふ。夫れから『法然上人行狀繪圖』には、此種の妻飾をもつた立派な建物の圖が澤山にある。

斯の如きのを「狐格子」キツネコウシとも「木連格子」キツツレコウシともいふが、『日本建築事彙』には其語源について種々の説を掲げ、終りに

「つまみ格子」なる語先づ出來たる後之に、狐格子又は狐格子の字を當てたることは確ならん、之れより狐格子となり終り木連格子となりたることは疑なかるべし。

とある、『三才圖會』には

懸魚下格子名狐

と至極簡單に片附け、石橋絢彦博士の『工業字解』には

搏風板ノ後方ニ大平椽虹梁等ヲ置クノ代リニ格子ヲ遺戸ニシタルモノヲ置ク今俗ニ狐格子或ハ吉連格子ト云フ此ノ如ク略シタル所ニ懸魚ヲ懸

クルコトアレドモ時ニヨリ之ヲ廢シテ只六葉ノミヲ置クナリ……絢彦按スルニ狐ト狐ト形相似タルヲ以テ狐ヲ書スベキニ狐ヲ書シつまつねト訓ズベキヲきつね狐字ノ和訓ト訓シ又轉ジテきつねヲ吉連ニ書シ誤リシモノナラン果シテ然ラバ狐ト吉連ハ狐ノ誤轉トイフベキナリ。

となる。私は此語源を少しも研究した事がないから説をたてかねる。併し兎も角も名稱だけは確かだ、「キツチカウシ」でも「キツツレカウシ」でも通ずる。當代の妻飾としては先づこんなものである。

次の

室町時代 は前時代の繼承で、別段變つたのではない、たゞ他の細部の變遷と同様、大分に裝飾がふる執拗くなり、江戸時代のゴチャ／＼した妻飾の元をなしたのである。例へば土佐神社本殿(高知岡郡宮村)の妻の如く、前包マゼツ——屋根に接して横走せる細長なる木——の上に三斗三具を置き、其上に

大虹梁をのせ、中央に慕股、兩方に大瓶束をたて其上に二重目の虹梁及び大瓶束がある、でかうなると名も簡單につけられぬ、先づ斗栱二重虹梁慕股大瓶束式とでも言はなければならぬ、語呂も悪くいやに長い名で工合が悪ければ、先の分類の最後の中へ入れ、混成複合式と呼ぶより仕方がない。

當代二重虹梁慕股式の絶好例は、京都市内目貫の而も最も便利なところにあるから、誰れでも常に見てゐるが、恐らくは氣がつかぬ事と思ふ、夫れは八坂神社の樓門である。あれは室町時代の代表的妻であり、大棟の端を飾れる獅子口に「經の卷」が五本ついてゐるの等は、今日繪巻物——一例は『伴大納言繪卷』にある——以外には一寸見られぬ圖である(第六十)。

第六十圖④は虹梁に笈形附大瓶束ので、永享十年(上棟は同)、の建築だから、室町としては早い方

である(第三十、九圖⑤)、虹梁の下中央には景物として、花肘木二斗及び實肘木が裝飾に入れてある。當代の樓閣建築として有名な鹿苑寺金閣(應永四年)の初重、池の方に出張つてゐる一間一面の小建築「漱清」の妻は同じく虹梁に笈形附の大瓶束である。笈形なしの虹梁大瓶束式は、第六十二圖③なる酬恩庵本堂(所在地名を冠して、俗に辨一休寺と云)・吉備津神社本殿(同圖⑥備)其他いくらもある。

二重虹梁大瓶束式には第四十九圖②に東福寺東司のがある、第六十圖④は東大寺大湯屋後面の立面圖であるが、大湯屋なんでものは今實際使つてゐる寺はないから、何處も同じでこゝも荒れるに任せある有様で、浴室の正面唐破風——第四十八圖⑤——下に掲げてある公慶上人筆六字名號の位牌型の額に江戸時代の係を偲ぶのみ、塵埃到る所に堆く、ちと形容が過るかも知らぬが、徒に狐狸の住處となつてゐる、殊に其東側即ち圖に示して

ある側の草原を、晩秋の頃、虹梁や大瓶束のいゝ

形に見蕩れ、上ばかり向いて足元留守に歩かうも

のなら、裾一面に「ヌスピトハギ」がついて何とも

始末に悪いが、其妻飾は此時代の最も完好な例の

一つである、就中、其虹梁と大瓶束との間に、一

種の線形を有する薄い木片を挿入したのは、法華

堂禮堂内部の手法から暗示を得たらしいが、夫れ

にしてもこゝへ應用したのは新案といへやう。此

建築は應永十五年ださうだが、如何にも其邊だら

う、唐様の二ツ斗や三ツ斗や鼻線式の木鼻や、其他

の細部何れも氣に入つた建物で、私は所有大湯屋

中これが一番好きである。

勾配が極めて緩な平唐門で、下端に大面取の女

男梁の上に、背低く充分左右に延びた板墓股をお

いた、華車で形のいゝ例は同圖⑩なる法隆寺北室

院門の妻に於いてみられる、これは明應三年の建

築である。其他四脚門で東大寺法華堂北門式のな

ら當代にいくらでもある。

狐格子——木連格子——の例を二つ許り掲げて

おく。第六十二圖⑩は慈照寺（銀閣があるから俗に銀閣寺といふ）東求

堂の妻であるが、これは大棟を側面の中心に取ら

ずして、少し振らして柱の眞上にもつていつてあ

るから、一寸は氣がつかぬが左右相稱の様でさう

でなく多少の變化をつけてあり、破風の拜みには

梅鉢懸魚を下げてある。石橋博士が懸魚の代りに

六葉を置くと言はれたのは、此れか切懸魚かを大

きな六葉と誤認されたのかも知れぬ。まさか六葉

斗りおく事はあるまい。

同圖⑪は例の上醍醐清瀧堂拜殿で、本殿との關

係からいふと側面——絶対にいふと正面——入母

屋妻入の立面圖で、これは狐格子に「懸魚を懸」け

てある例である。

以上二つの建築は、妻の格子の継子が、宇治上

神社拜殿のゝ如く、破風の（ベツツク）前包の上を覆ひ、妻の

流れの上迄延びてゐて、眼が粗い。併し新しいの

はさうでなく、須覆スオビの上で止まつてゐて、眼コソは細

い。だから縦子が前包の上を覆ふのは古い式である。いつ頃から須覆の上で止まる様になつたか氣をつけた事はないが、これは須覆が前包より前に出てゐるから、勢ひそこで止まらざるを得ないので、止まるご止まらぬとは須覆を用ゆるご否ごによつて決まるのである。然らばいつ頃から夫れを用ひだしたかといふに、まだ調べて居らぬから確言出来ぬが、桃山位からではあるまいかと思ふ。

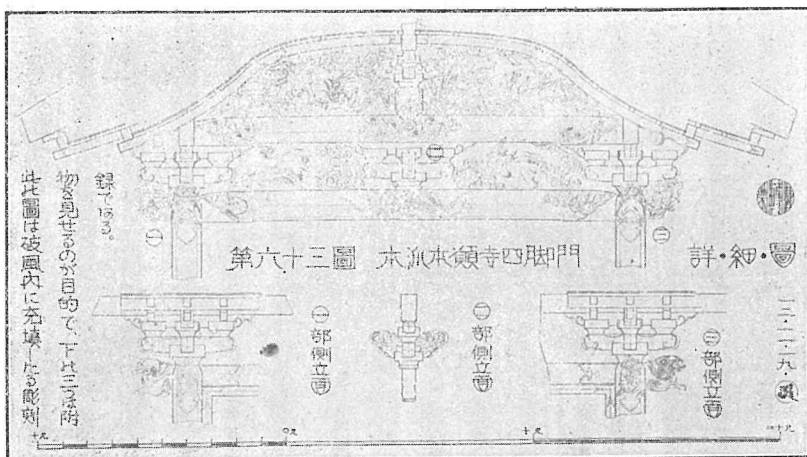
分類の節、少し長い名でまづかつたが、仕方なしに虹梁三東海老虹梁式とつけたのが當代にあるやうである。甚だ曖昧な記し方だが、實はこれも明通寺本堂と同様未だ實物をみた事はなく、同じく小さい圖によつてかくのだから、あの時と同じ心配がなくもないからである。併し他の類例から推して、此時代にかゝる妻飾があり得ると思ふか

ら、こゝに記すのである。

曩にも記した通り、此式は中央の大瓶束から左右に海老虹梁を出したところに特徴があるのであるが、此れを新意匠と言へば言へるものゝ、其實笈形の上端は其儘中央の束につけておき、そこを廻轉軸とし、下端を上方に動かすごこの形が出来、大瓶束へ笈形をつけたのは鎌倉時代だから、當代になつて此位の考へを出すのは當然であらうと思はれる、併しさう言つて了へば夫れ迄だが、矢張新發明である。

桃山時代 になると、妻飾は大々の發達をしたので、透間なく彫刻で埋める様になつた、即ち所謂彫刻充填式である。

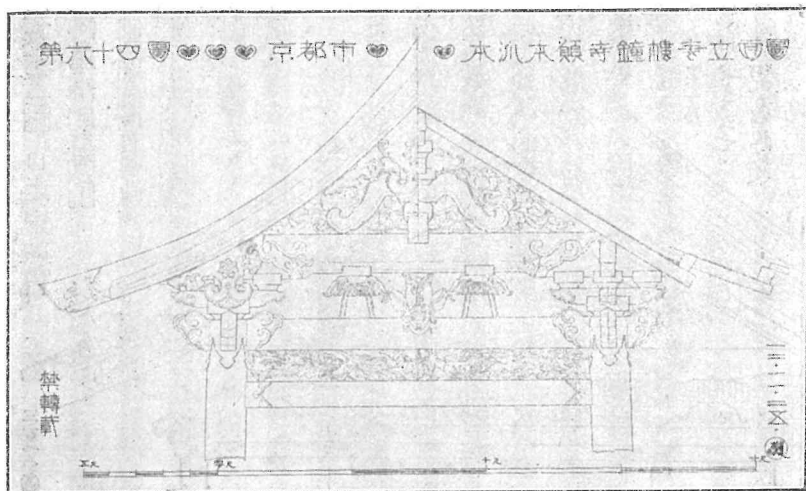
第六十二圖の㊦なる大崎八幡は、桃山としてはまだ大に簡單な方であるが、同圖㊧なる大徳寺唐門に於いては、冠木の鼻の上に唐獅子の丸彫を置き、頭貫と虹梁との間には牡丹唐草を埋め、虹梁



には袖切に當る所に象鼻を彫り、若葉は恰も其口から出た火焰の如くで、大瓶束の下部結綿に相當する所は、象か猿の様な理想動物の頭を刻み、其兩側三角の部分には、雲に瑞獸(麟)が一ぱいに彫つてあり、懸魚・破風に至る迄いろいろな意匠が凝らしてある、だから妻飾としては非常に綺麗なものである。

第六十三圖なる本派本願寺四脚門は所謂向唐門だから、其飾は妻飾ではないが、平唐門ならこゝは妻であるし、初めにかいた通り廣い意味に於いてこれを妻飾として差支はない。其裝飾は牡丹に唐獅子の遊戯の場で一ぱいになつて居り、其下部二重の虹梁の間は、これも亦雲に麒麟で埋めてある。其ほんとうの妻は三角で、薄肉丸彫の鶴がつけてある。序ながら同寺波の間玄關入母屋妻には同じく薄肉丸彫の鳳凰が二羽つけてある。

同寺鐘樓の妻の三角は牡丹、頭貫と虹梁との間



には、左右に裝飾附間斗束(第五卷第四號八十八頁、其上段及二十五圖參照)、其中央に下方を向いて將に走り出さんとする如き姿勢の丸彫の唐獅子を飾につけてある、日光東照宮陽明門前石柵の親柱につけてある石の丸彫の「恐悅飛越の獅子」と稱するものは、多分こんなところから考へつたのかも知れぬ。そして頭貫と飛貫との間には桐・鳳凰・牡丹等の透彫が入つてゐる頗る混雜したものである(第六十圖)。

以上の三つの如きものを「彫刻充填式」と命名したのである。大して不都合の名とは思はぬ。

併し是等は何れも小規模の建築に止るので、大きいものではさう透き間なしに彫刻をうめる事は出来もせず、またしもしなかつたのである。其一例は同寺大誓院の妻の如きは、あの廣い面積を狐格子で埋めてあるが、餘りに單調過るせいか其まん中邊へ、入つ藤の紋(今東本願寺で重に用ひられてゐる)を薄肉に刻んだのを三つつけてある。

第六十二圖 日光東照宮

上神庫南側立面圖

同光廟建築圖附圖より寫す

北側には家持に牡丹唐草
を彫りかしてある。

尚此圖には、海老蛸窓下

端比肩 兩側・大筋

束三斗上の

袖坊 及び同

木靴束

象鼻

又對側此

雲紋を刻せ

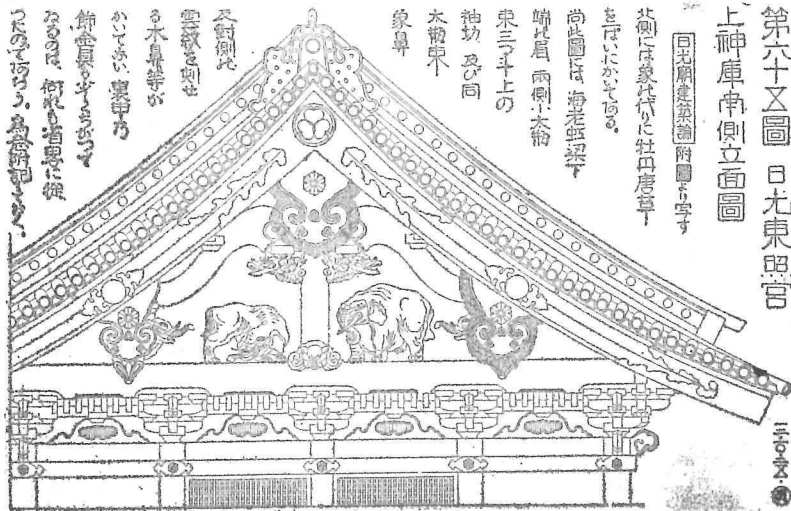
る木鼻等が

かいてある中か

飾金具も少くなく

なるのは、何れも古風に倣

つてあらう、爲高附記より



三〇三

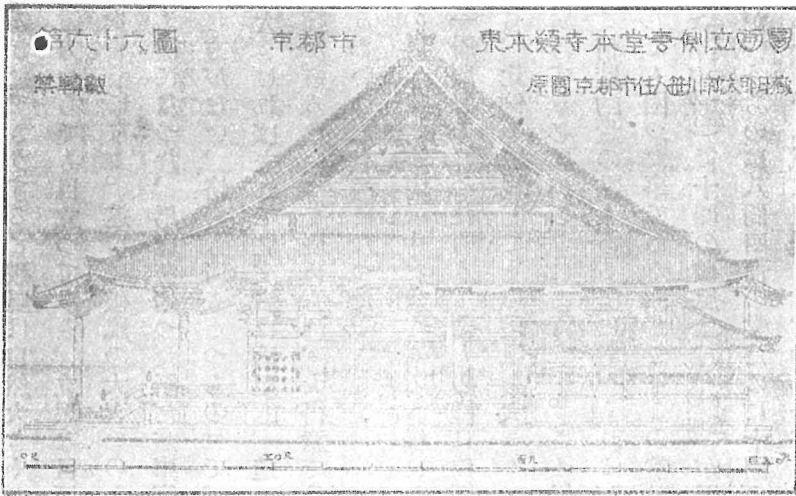
其他、これ迄に記した各種の妻及び其組合せがあつた事は勿論である。

江戸時代、は矢張桃山の續きと見られる。法隆寺中門及び同寺金堂の現在の妻飾(第六十圖)の如きは

簡單な例であるが、日光・上野・芝等の靈廟に好例が澤山にある、假に日光の例をとつてみると、多くは二重虹梁若くは大虹梁大瓶束式で、廻廊の様な小さいものには家扱首が多く用ひてある。

日光東照宮神庫の妻は、寶飯八幡と同じ特殊のものである、たゞあれと異るところは、下端は大虹梁、左右は大小大瓶束、上端は海老蛸窓で圍まれたる四角な空地へ、南側は薄肉彫大象一疋づゝを入れ、北側は其代りに余り上手でない牡丹唐草をうめてある事である(第六十圖)。

又此時代には、切妻又は入母屋の下方の桁を少しく前方に持出す爲め、前包の上に用ゆる斗拱を出組にする、だから斗拱上の虹梁との間に隙が出



来る、此隙を埋める爲め支輪を用ゆる事が多い。

出来た時は明治であるが、様式からいふと江戸時代の、嘗て第四十五圖①に一部を示した東本願寺本堂の妻は、世にも手の込んだものである。こんな後世の堂になると、其平面が正方形に近いから、自然屋根が大きくなる、そしてまさか妻入にも出来ぬから矢張平入である、だから正面からみるとまるで屋根斗りの様であつて、別段に立派に見える事も出来ぬ故、妻を充分に飾つてよく見せるのである。

序にかいておくが、昔しは破風の位置が大分引込んでゐたから、正面からは恰好がよし、妻もさう込入つた飾りもつけず、従て薩張としてゐて側面からも亦恰好がよかつた、鳳凰堂の如きは其一例である——尤も飛鳥時代の破風の位置は鳳凰堂の夫れより出てゐるが、夫れにしても妻の壁と同一平面位である——然るに後世になる程前の方へ

追出してきた、さうすると破風は自然大きくなるから、遠方からでも目立つてみるゑ、立派な目標（

Hand Mark）になる。遂には破風の大きいのを自慢し合ふ様になつた、馬鹿氣切つた話だが事實だから致し方がない、格好も何もそつちのけで、破風さへ大きければ夫れで註文者は満足し、造つた大工は腕があるといつて褒められ、大得意で益々繁昌するといつた有様になつた。

破風の競争は寺が町の中に建てらるゝ様になつてから一層劇しくなつたらう、昔しの様に周圍が廣潤なら、比例を無視してまで破風を大きくし、自己を廣告する必要がどこにあらうか。さう思つてみると情狀酌量の點もある様に考へられるが、夫れにしても困つた事である。「どこそこの堂は十間四面（これは方十間といふ意）で十間の破風（これは堂栴當といふ意）が懸つてゐるが、うちのは八間四面の堂だのに十間の破風である」といふ風に自慢する、會ま恰好に留意

する。大工があつて、堂不相當の破風を要求された場合等に、註文者に向ひ其非を説明すると、不心得千萬とあつて早速お拂箱になつて了ふさうである。いくら技倆拔群でも食はずには居られぬから、心ならずも分らず屋の意を迎へ、不恰好なのを造るのださうな、果してさうなら豫ての持論である大工の教育よりも、先づ第一に註文者側の頭を改良せねばならぬ。

夫れは夫れとして、元に歸り第六十六圖はよく江戸時代末期の様式を現はしてゐる、圖が小さくて判りにくいから一通説明をしておく。先づ下からだと前包——新しい建築に於いては、前包の上に須覆（すくわ）といふ横木をもう一本渡してあるのが普通である——の上に七具の出組の斗栱を置きて大虹梁を支へしめ、其上に同じく五具の出組の斗栱及び二重目の大虹梁がある。此斗栱間は、下方の刷毛板には浪、上方は幕股で飾つてある。二重目の

大虹梁上には左右に大瓶束、中央には内に装龜の彫刻を入れた大墓股があり、尙其間には格狹間がある、も一つ其上が三重目の虹梁で、中央に笈形附大瓶束をおく、だから下から見ると、二重目の虹梁迄には出組が二度繰り返してあるから、大分に出てゐる、其出たところは支輪で塞いである、斯様に二度も出すのは破風を大ならしむる目的である。そして破風は全部青海波の模様を施した銅板で包み、拜み・腰及び破風尻などに金銅飾金具を打ち、懸魚は拜みのも降りのも何れも三花で、これ亦飾金具ですつかり巻いてゐる、だから非常に複雑なものである、だから仕方なしに「混成復合式」と命名したのである。澤山の種類のものがたい並べたり上下になつたりして置てある丈けで、全體としても統一なく、簡素な家扱首や二重虹梁墓股に及ばざる事遠しである。

此れより少し簡單なものには、知恩院阿彌陀堂が、

いゝ例になる、二重入母屋造の佛殿で、おそろしく大きな破風がかけてある。

東海道は豊橋驛に新築するさうである豊川稻荷の豊川閣は、計劃圖でみると七間十二面二重入母屋妻入の廣大なもので、妻飾は例の出組三斗や支輪や墓股やいろいろなものを用ひてあるが、これは未だ出来てゐぬさうだから、今のうちならどうでもなる。こんな種類の型に倣つたのは到る所にざらにある。

最後に京都市にある極く新しくて餘程變つてゐるのを舉げておく、寺町通四條下る東側に透玄寺といふ寺がある、これは門の袖塀の壁が薄紅色の漆喰で塗つてあるから直に判る。門を入ると突き當が本堂であるが、入母屋造起破風の妻入で、妻飾は狐格子、正面三間、中央の間は扉を釣込み、兩脇の間は花頭窓、勾欄附の椽があり、木階敷級で此椽に昇る様に出来てゐる甚だ奇抜な意匠であ

る。入母屋妻入で狐格子を妻飾としてゐる丈けなら差支ないが、起破風はどうも變だ、本堂として威嚴がない。どうせ新築するなら同じ金でもつといふものが出来たらうに、惜しい事をしたものである。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

書けば限りが無いから、妻飾の記載は此位にしておくが、鎌倉時代にあつた上土門の妻も亦一樣式として記録さるべきであらう。繪としては、其最も完好な例は、『頰燒阿彌陀綠起』(神奈川縣光觸寺藏。鎌倉時代。)にある、其妻飾の輪廓は、恰も法隆寺北室院平唐門の輪極と同じである。これ迄二度許り引合に出した『法然上人行狀繪圖』にも、略此と同程度のいゝ例を見出し得るであらう。此と同じ様式で平唐門の様な妻をもつてゐるのが、『蒙古襲來繪卷』(御越前守長隆(長章)筆。鎌倉時代。)にあるが、後者は或は平唐門とした方がいゝかも知れぬ。出所は一寸判らぬが、いづ

れ繪卷物から採つたと思はるゝいゝ圖が「工業大辭書」に出てゐる、併し其説明に「……専ら中古武家居館の門として用ひられしも今はなし」とあるが成程精確にいふと今は亡い、けれども、たゞ屋根葺の材料が異つてゐる丈けで、類似品なら立派なのがある。

實例では、實際に土は上つてゐぬが、此様式をもつてゐるのが、法隆寺と東大寺とに残つてゐるのは珍とせねばならぬ。前者は法隆寺南大門を入つて左側二つ目の門で、近頃修理して立派になつた、これは檜皮を以て葺いてあるが、兩妻の飾板の上部に近く、小木片が恰も棟木が此板を突き抜いた如くについてゐる、これは、前記『頰燒阿彌陀綠起』の繪に出てゐるのと全く同一である。

此れに比べると、東大寺塔頭寶嚴院の門はずつと落ちる、兩妻の板もまづい形だし、殊に其下縁中央に一種の曲線より成る空所を作つてゐるのは

無意味である、其上兩妻の板の輪廓なみに全部棧瓦葺にしてあるから、うっかりしてゐると拙い平唐門と間違へる位である。此寺の住職は、此門は「花上門」で他にない珍しいものだ、といふのは門の上に土が乗せてあるから、そこへ四季折々の花を植えるのだ、と言つた。「花上門」とはハナアゲモン、と訓むのださうである。其名の據て來た所以の當否は姑く措き、初めてきいた名だから、いろいろ調べてみたが、左様な名稱はつい見出せなかつた。或は昔しの本にでも出てゐる名かも知れぬ、もしさうなら、國文か國史の専門家の教を乞はぬと、私には一寸調べかねる。

寺の庫裏の妻も一種の式をなしてゐる、これには大瓶束や海老虹梁等を用ひたのもあるが、縦横材が主だから、矢張縦横式に入れてもいゝ様に思はれるが、併しさうなると大社の妻の様な、眞の縦横材のみとの區別が出来なくなる處がないでも

ない、其上、庫裏によつては破風を途中から接いだのがある、無論態と接いだので、接手は重なつてゐる。

此れは昔し、本山か何かでない以上、三間以上の庫裏は建てられなかつた、でも三間では小さくて困る、その時破風を途中からつぐ、さうすると接手から先は廂といふ事になり差支なかつた、だから大概はこんな事にした。但しこれは單に京都及び其附近丈けに限り、一般地方に迄は及ばなかつたのかも知れぬ、今迄餘り氣をつけず従て少しも記憶にもないし、手帳にも扣へてないから、どうであるか今急にはわからぬ。

宇治の黃檗山萬福寺の諸建物は、大部分が大社の妻式に縦横材から成つてゐる、だから此等は同じく「縦横式」でいゝ筈であるが、庫裏は少しく異なつて居り、其屋根は本葺で、破風は途中で接いであり、手の方では流の途中に廂と主屋との區別

を現すべく、軒先と同じ様に疏瓦つみかばらと花瓦あふかばらとを一
通り並べてゐる。京都市本能寺のは、破風接手の
ところに隅出巴後を置き、蓋蓋後をのせて此の區別
をつけてある丈で、平の方は全體が棧瓦葺だか
ら別に區別をつけてない。萬福寺や本能寺は本山
だから。斯様にせぬでもないのにと思ふがどうし
たのか。其他京都市寺町四條・五條の間にある寺
には此式が多い、其一例は寺町通り綾小路を下つ
て、少し行くと左手に狭い曲つた横町がある、其
横町を富永町俗に長寺通りといふが、其富永町へ曲らう
とする一二軒手前東側に聖光寺といふ寺がある。
今度は富永町を曲つて暫く行くと、北側に勝圓寺
といふ寺がある。此二寺の庫裏は、主破風の尻に
立派な繪様がつけてあり(第四十九圖の参照)、更に其後ろ
に重なり合つて廂破風をつけた頗る入念の仕事が
してある。斯様な手法は前にも書いた通り、京都
及び其附近にのみ行はれたに過ぎないのであつた

かも知れぬが、夫れにしても確かに庫裏の妻の一
特色と言へやう、だから、こんなのを總て引包くまめ
て「庫裏式」といふ名にしてはどうか。私は此の名
は至極適當だと思ふ。但し京都市妙法院のは特別
で、入母屋妻入、唐破風の玄關附、妻飾虹梁大瓶
東といふ堂々たるものである、此庫裏は豊大閣千
僧供養の舊建物と傳へ、屋根に慶長九年の銘のあ
る鬼瓦がのつてゐる大きな建物である。

長崎の崇福寺護法堂妻の如き飾を有するのは、
異例として別扱にした方がよからう、斯の如きは
「明式」でもしておくか。

奈良の有名な「北山十八間戸」——奈良市興善院
町所在——は、隨時隨所に模様替及び修繕が施さ
れた形跡は歴然で、其上今随分にひどくなつて居
り、荒れ果てゝ殆んど手がつけられぬ位で、寧ろ
建つてゐるのが不思議な位である。其北端は問題
にならぬが、南端は夫れでも純然たる「縦横式」で

あり、今では棟木を支持せる東上に、唯一つ残れる斗に古を偲ぶのみなるが、猶且何處となしに鎌倉の臭ひがしてゐる。で今かいた様に現在は「縦横式」だが、當初はさうでなくて「豕扱首」であつたらうと思はれる、併しこれは全く證據はない、たゞ私がさう思ふ丈けである。

奈良の春日神社廻廊についてゐる内侍門・清淨門等の妻飾も亦二重虹梁墓股である、現今のは文久二年の建築だから、本殿同様材料は新しいが、様式は、此亦本殿同様古いと見てよからう、果して然らば此の式は治承三年からさうであつて、夫れが續いてゐるのである。併しこの二重虹梁墓股は、此等の門が廻廊の間に挟り、其上屋根の差が左程にないから、内側から見得るのみである。

同境内末社のうち、多賀・椿本神社等のは大墓股で飾つてある、此れ等は初めに掲げた分類の(二)即ち虹梁墓股式を一層略したものであるが、墓股

が大變に大き過ぎて恰好甚だ宜しくない。

そこへ行くと、同じく江戸時代ではあるが、都市八坂神社境内、末社蛭子社社殿——様式が特殊だから祇園造といふ名がつけてある——の妻に用ひてある大板墓股の方が、形もいゝし、釣合もとれてゐて、春日の末社より數等上に位する事が出来る。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

京都市在住の讀者諸君子は、時々岡崎公園を散歩せらるゝであらう。假に岡崎公園前で電車を下り橋を渡ると、左手に公會堂がある。此れは御大典の時の建物の内を、市が宮内省から貰ひ受け、公會堂としてあすこへ建てたのだと豫てきいてゐるが、當時私はまだ京都に住んでゐなかつたから間違つてゐるかも知れぬ、併し兎に角、此建物には入母屋や切妻が幾つかあり、其「妻飾」は狐格子

か豕扱首である。正面中央檜皮葺の大きな車寄に用ひてある幕股は、其形は鎌倉時代の遠慮のない模倣であるが、上に二つ斗をのせてある。右のうち、狐格子は可もなし不可もなし、豕扱首は少し細過ぎると思ふ、幕股上の二つ斗は何だか少し變である。

公會堂の後ろ即ち北側に武徳殿がある、いつ出來たのか知らぬが、外觀如何にも岩乘で、擊劍や柔道をやつて、ごの位暴れても大丈夫らしいのは至極よろしいが、其妻は縦横式で型に倣り、乾燥無味嚼緊めてみても味も何も出ないこと肉汁ノツのだしがらの如く、お負けに此れより拙くは出來ぬといった様な、變挺な曲線の輪廓をもつた、不恰好な珍懸魚が破風の拜みからぶら下つてゐる。本館の後面即ち北側に、一間一面向唐破風の車寄がつけてある、これは私は未だ内部をみた事がないから違ふかも知れぬが、多分貴賓席が北側にとつて

あるので、態々こちら側へつけたものと想像してゐるが、べた一面の彫刻が用ひてあり、例の龜岡式の亞流である、同氏に私淑してゐる人の仕事だらう。曲線も割合に上手で大體は似てゐるが、充分意味が呑込めずにやつたのである、故人自ら手を下したのでないことは明らかである。本館がある有様で、夫れについてゐる車寄がこの有様だから、全然異なつたものを勝手に二つ並べたことになつてゐる、だから、「木に竹を接いだ様だ」とか「狐を馬に乗せた様だ」とかいふのは、私は未だごちらも實驗した事はないが、多分こんなのを形容するのに適當な文句だらうと思ふ。拙いにせよ本館が先きに建つてゐたのらしいから、車寄をつけるとしたら本館に倣ひ、そしてつと洗練した細部をもたせてつくるべきである、たゞ無暗に自分の腕を見せるつもり(?)で、近所お構ひなしに計劃するものだからあんな變な結果になつて了つたので

